人類学者・移川子之蔵博士のこと（その4）
ー美を探求する兄弟たちー

明治大学島嶼文化研究所客員研究員
柳沼亮寿（九十期）

私はこれまで『桑野会報』をはじめとした校友誌などで、何度か移川子之蔵（うつしかわねのぞう）について紹介する機会をいただいた（1）。移川は1904（明治37）年に旧制安積中学校を卒業して（安積16期）渡米し、10数年後の1917（大正6）年、ハーヴァード大学大学院にて哲学博士（民族学専攻）の学位を取得して帰国した。一時、慶應義塾大学、東京商科大学（現在の一橋大学）で教鞭をとったが、1928（昭和3）年、台北帝国大学開学にあたり文政学部「土俗学・人種学講座」の教授として赴任し、終戦まで台湾にて研究生活を送った（写真1）。

移川は歯科医を志して渡米したとする（二本松市1989：44）一方、彼の高弟・馬淵東一（台北帝国大学卒、戦後は東京都立大学教授等を歴任）によれば、当初は美術や建築の勉学を目的としていたようで、墨絵や陶器を愛し、芸術家肌のところがあったという（馬淵1947：144）。私は移川の博士論文「インドネシアの装飾文様の諸相」や「装飾文様から見たアイヌ」などの論稿から、研究上においてもその傾向をみたのであった。また、兄の三郎（三男）が日本画家で（雅号は浩哉［こうさい］）、子之蔵（四男）とともに渡米した弟の末之介（五男）は、帰国後、建築の道に進んだのである（写真2）。そればかりか、子之蔵の長男が水彩画を描いていたとか、浩哉の孫に声楽家がいること、末之介の孫が建築に従事していたことなどを知ると、私はますますこの三兄弟をめぐる芸術の世界に引き込まれてゆくのだった。子之蔵については、いずれ装飾文様を含めた彼の人類学的研究の全体像に迫りたいと考えているが、今回は、兄・浩哉を取り上げてみたいと思う。内容は、二本松市教育委員会をはじめとした各方面の調査、および浩哉の孫で声楽家の移川澄也氏をはじめとした親族からの聞き取りによるものである。なお、この聞き取り内容は、澄也氏や親族が父やその他の親族から聞いたものである



写真1　台北帝国大学時代の移川子之蔵博士



写真2　後列左から子之蔵（15歳）、末之介（14歳）、三郎（21歳）

ことをお断りしておきたい。

浩哉については、子之蔵とともに『福島県史』第22巻と『二本松市史』第９巻の人物編に紹介されているが（福島県１９７２：83、二本松市１９８９：44）、ここでは後者（添付１）と筆者が作成した「移川三郎（浩哉）の略歴」（添付２）を載せておこう。まず、子之蔵を調査している過程で入手した過去帳（写）によれば、浩哉は１８７９（明治12）年２月６日生まれで、子之蔵の６歳年上である。しかし、小学校や中学校などの経歴はわからず、子之蔵の出身中学校（当時は福島県尋常中学校）に在籍したという記録はない。また、どこで絵を学びどのよう

添付１　人物紹介（『二本松市史』第9巻、44頁）

移川　浩哉　画家　②［出生地］二本松（根崎）③［死亡地］東京　⑤［本名］三郎　⑥［伝記］明治33年東京美術学校（現東京芸術大学）日本画科卒業。橋本雅邦、川端玉章に師事。中国大陸にわたり、四川省成都中学校教諭として美術教育にあたり、また歴史学を研究。帰国後中央画壇で活躍、もっぱら個展をもって世に問い、独創的な日本画の境地をひらいた。昭和19年頃、戦災のため二本松に疎開。福島美術会創立会員でもある。

・［　］内は筆者が追記した。

添付２　移川三郎（浩哉）略歴

年　月　日		年齢	経　歴
1879(明治12)年	２月６日	―	移川家第11代嘉蔵博高（呉服太物商）の三男として、二本松町根崎に生まれる
1895(明治28)年	９月	16	東京美術学校「豫備之課程」に入学する
			この頃、在京の「二本松郷友会」に参加する
1900(明治33)年	７月	21	東京美術学校「絵画科日本画科」を卒業（第８期生）。卒業制作（日本画）「秋景山水」。研究科（日本画）に進学する
1901(明治34)年	12月７日	22	茨城県立下妻中学校に赴任、「芸術(美術)」を教える
1903(明治36)年	７月	24	東京美術学校研究科（日本画）を修了する
1907(明治40)年	９月６日	28	茨城県立下妻中学校を退職する
1910(明治43)年	12月	31	四川省成都中等工業学堂に赴任し、美術を教える（明治42年赴任との情報もある）
1911(明治44)年	末頃	32	孫文の辛亥革命のあおりを受け、帰国する
	12月17日		東京美術学校日本画科の教員、生徒、卒業生で組織された東台画会（後に東台美術会）の会員となる
1916(大正５)年		37	「大正五年度 現代日本画 帝国絵画番付」に名が載る
1919(大正８)年		40	福陽美術会の結成に参加する
1922(大正11)年	11月２日～４日	43	福島市公会堂で開催された展覧会（第５回福陽美術会展と合流か？）に出品する
			大正年間に三越呉服店（美術部門）に勤務か？
1944(昭和19)年		65	戦災のため郷里の二本松に疎開する
1953(昭和28)年頃		74頃	この頃、戦後最初で最後の個展を開く
1963(昭和38)年頃		84頃	この頃、脳卒中で倒れ、床につく
1967(昭和42)年	11月23日	88	東京・阿佐谷（成田東）にて死去。二本松の顕法寺に眠る

にして東京美術学校に入学することになったのかなどの経緯も明らかではない。明治初期には廃仏毀釈の影響で仏画や仏像が相当失われ、欧化政策の下、日本画家は極度の貧困にさらされたが、工芸、美術などを対象とした博覧会や展覧会の開催によって画家が再び脚光をあびるようになったという。また、教育の発展によって美術学校や美術塾に学び、後に才能を伸ばして名を成した人として９人の名が挙げられており、その中に浩哉の名があった（福島県１９７１：５５８、二本松市１９８９：５８５）。東京美術学校が開校されたのは１８８９（明治22）年で、浩哉が入学したのは明治28年（第８期生）である。まだ16歳で大人ほどの体格はなく、「肩上げ」（着物の袖を短くすること）がとれていなかったという。彼は予備の課程１年の後、絵画科日本画科の本科に４年間在籍し、明治33年７月に卒業した。この間、日本画の巨匠で新時代の要請に応えようとしていた橋本雅邦や川端玉章らに師事している。卒業後、更に研究科（日本画）に進み、最終在籍年度が明治35年度との記録から、明治36年７月に修了したものと思われる。また、この時代の在籍者リストを見てみると、明治22年入学の一期生には横山大観（日本画科）が、30年入学に高村光太郎（木彫科）、33年入学に青木繁、熊谷守一（西洋画選科）の名があった。あの森鴎外が同校で「美学」を講じていたのもこの頃である。また、福島県出身者は浩哉の前にはわずか７名しかおらず、そのなかには朝河貫一と同期の服部保一（安積４期）の名がある。彼は明治25年に入学して日本画科を卒業後、福島師範学校に奉職し、県内での美術運動の端緒となった研究会、「アートクラブ」の結成に参加したのであった。明治期に入り、学校教育が開始され、芸術の世界も学校教育の中で育まれるようになった時代であったのであろう。この頃、弟の子之蔵は明治32年に安積中学の前身、福島県第一尋常中学校に入学していることから、呉服太物商（絹織物の呉服と綿や麻織の普段着を商う）を営む二本松・根崎の家は裕福だったものと思われる（屋号は「うつしや」）。なお、長兄の源吉は明治35年３月に第12代当主として家督を継いでいる。

調査を進めると、浩哉は東京美術学校の研究科に在籍しながら、１９０１（明治34）年12月から１９０７（明治40）年９月まで、茨城県立下妻中学校（現在の下妻第一高等学校）で「芸術（美術）」の教師をしていたことが分かった。そして、その後３年ほどして四川省の成都中等工業学堂に赴任している。その背景には清国末期の教育制度の改革があるようだ。１８００年代後半に普通教育の小学課程、中学課程を基本とした近代学校が設立され、日本への専門家派遣などを通して近代学校教育が本格的に始動すると、中学堂と高等小学校に「図画」の科目が設定された。このことにより、１９０４（明治37）年以降、東京美術学校の卒業生たちが清国の諸学校に派遣されたのである（鶴田武良１９９６：４－５、16）。［添付１］には成都赴任中に「歴史学を研究した」との記載がある一方、孫の澄也氏によれば、この清国滞在で彼の画風が確立したのではないかという。帰国後の大正年間は、もっぱら個展を中心に制作活動を続けたものと思われるが、その開催の具体的記録を確認することはできなかった。ただ「大正五年度現代日本画帝国絵画番附」の「東京之部優秀画家」の欄に名を連ねている。また、１９１９（大正８）年、福島県出身の日本画家が東京で福陽美術会を結成するが（『福島県史』第22巻、『二本松市史』第９巻に記載の「福島美術会」は誤りであろう）、発起人のひとりとしてこれに参加し、１９２２（大正11）年11月、福島市で開催された展覧会（第５回福陽美術会展と合同か）に出品している（福島県立美術館１９９６：72）。しかし、福陽美術会の会長は勝田蕉

琴、幹事には荻生天泉（安積14期）、太田秋民（子之蔵と同じ安積16期）、湯田玉水、坂内青嵐（幹事長）など、東京美術学校の後輩たちが中心となっており、浩哉は要職にはついていない。

一方、時期は不明だが、第二次大戦前に三越呉服店の美術部門に在籍していたという情報がある。この頃、長兄が跡を継いだ二本松の実家は、既に呉服業を営んではいなかったようであるが、三井呉服店時代からの関係があったものだろうか。それとも、広報やデザインの業界で当時三越にいた濱田四郎（安積7期）と関係があったのかもしれない（2）。澄也氏によれば、東京・阿佐谷に住んでいた浩哉は数件の貸家をもっていたということから、生活のうえで困窮することはなかったのではなかろうか。とすれば、三越呉服店に勤務していたのはごく一時期であったのかもしれない（3）。

次に、浩哉の絵はどこに所蔵されているのであろうか。ネットオークションでは掛軸「冬景図」や絵葉書「渓間」などの出品履歴が散見されるが、調査の範囲では、茨城県天心記念五浦美術館と二本松市教育委員会ＩＴ美術館が所蔵していることがわかった。前者には美術学校時代の課題画であった臨画「菩薩坐像」と写生「猿」が、また後者には風景画の「新緑」（添付3）が残されている。これは、緑のこんもりとした枝をつけた大木で、遠くに茅葺屋根の集落が見える。戦時中、浩哉が疎開している折に描いた故郷の風景であろうか。ただ寄贈年や寄贈者などの詳細は分からない。澄也氏によれば、東京・青梅の古い寺に襖絵があるというし、他の親族によれば、浩哉は若い頃、二本松藩主であった丹羽家（維新後は在東京）の姫様方に絵を教えていたことがあり、丹羽邸の引き戸に描いた絵は、現在、二本松にある丹羽家の菩提寺・大隣寺にあるという（筆者は未確認）。また、浩哉の絵には梅を描いたものが多く、親族では浩哉の子供たちが買い取ったものもあり、澄也氏自身も父から色紙や掛軸などを受け継いでいる（写真3）。



添付３　「新緑」二本松市教育委員会ＩＴ美術館蔵



写真３　制作中の移川浩哉（61歳）

一方、浩哉は、アイヌ語学者・金田一京助と親しかったらしく、浩哉の絵をもっていたのではないかという。金田一は、民俗学者・柳田国男を中心とした研究者仲間として弟の子之蔵と関係があったことは知っているが、浩哉と親しかったというのは驚きであった。調べてゆくと、

浩哉と子之蔵の家は、ともに東京のＪＲ阿佐谷駅の南側に位置し、金田一邸の近隣であったことが分かった。また浩哉宅には、金田一の同郷で同級生の石川啄木からの手紙があったという。さらに、戦後、社会心理学者として知られた南博が浩哉の絵のコレクターであったというのである。これはどういう関係なのか。南博の父・大曹（だいぞう）は二本松町の出身であり、福島県尋常中学校卒（安積９期）なのであった。浩哉とは同い歳と思われ、幼なじみであったのだろうか。教育家・大内民恵によれば、１８９４（明治27）年頃、二本松町の隣村・杉田村から上京した際、東京には「二本松郷友会」があり、メンバーの中には大学を卒業した服部宇之吉（後に京城帝国大学総長）をはじめ、近藤達児（安積９期、後に代議士）、南大曹（近藤の弟で後に医学博士）、移川浩哉らがいたという（大内民恵１９３０：１９２）。大曹は明治後期にドイツに留学、東京・京橋に南胃腸病院を開設し、晩年の徳富蘇峰や夏目漱石の治療にあたった医師のひとりであった。従って、南博というよりは父・南大曹が浩哉の絵を購入していたのではなかろうか。なお、上記の大内は、著書のなかで序を寄せた服部宇之吉ほか５人に謝意を表しているが、そのなかには移川浩哉の名があり（大内民恵１９３０：２）、付き合いが長かったことが伺える。澄也氏によれば、浩哉は、いわゆる芸術家風の気難しさはみじんもなく、明るく、自由闊達な人であったという。弟・子之蔵の「ユーモアたっぷりの風格」（馬淵１９４７：１４４）と相通ずるようにも思われる。そのような性格であったからこそ、当時の知識人層のなかにあって関係を維持していたのかもしれない。

戦後、１９５５（昭和30）年頃、浩哉は一度だけ個展を開いたが、既に晩年といえる年齢になっていた。日本画の世界では、後に日展理事長を務め、２００６（平成18）年に文化勲章を受章した大山忠作（二本松町出身、１９２２－２００９）などが活躍した時代であり、世代は交代していたのである。現在、ＪＲ二本松駅前に「大山忠作美術館」があるが、大山以前にも優れた日本画家がいたことは地元でも忘れ去られているかもしれない。

ところで、お話を伺った澄也氏は子供の頃に絵を描いていたが、父（浩哉の次男）に絵の道には進まないよう諭され、合唱を経て音楽の道に進んだという。澄也氏は祖父・浩哉と同じ東京藝術大学出身であり、現在80歳をすぎてなお現役の声楽家である。また、浩哉の長男は一時印刷工場を経営していたが、彫刻をたしなんでいた。次男で澄也氏の父は、満州からの引き上げ後に乾物屋を営んだが、自分で看板を制作し、家具をデザインしていたという。浩哉の孫のひとり（長女の長女）は創造展に出品するほどであった。このように、浩哉の子孫で職業芸術家になった人は澄也氏だけであるが、生活や趣味の上では、芸術心を如何なく発揮していたようだ。

以上のように、移川三郎・浩哉の人生と画家としての作家活動については、今となっては確認できないことが多い。それでも調べを進めてゆくと幾つもの興味深い発見があった。浩哉はけっして中央画壇を牽引した画家であったとはいえない。しかし、明治期に日本画の世界に入り、その初期の時代を背負ったひとりであり、大正から昭和初期にかけて知識人層のなかで活動した日本画家であったといえるだろう。移川家は、藩政初期の寛文年間の初代以降、代々日用雑貨を扱う雑貨荒物商を営んでいたが、藩末期には呉服太物商として栄えたとされている。この呉服太物商への移行は、ある意味では、移川家の「芸術の血」がそうさせたようでもあり、その血は子孫に脈々と受け継がれているように思えるのである。

注

（1）東京桑野会会員ブログ（２０１８年２月）、『桑野会報』第４９号（２０１８年９月）、『東京桑野会会報』№47（２０２５年５月）、『東京二本松会会報』令和８年度号（２０２６年４月）である。

（2）濱田は郡山出身で、１９０５（明治38）年に三越呉服店に入社して広報を担当し、ポスター制作などを行った。「今日は帝劇　明日は三越」のキャッチコピーで知られ、大正末期に役員となった人物である。

（3）三井文庫にて三越呉服店の職員名簿を確認したが、大正年間の大部分が欠落しているためか、浩哉の在籍を確認することはできなかった。

参照文献

大内民恵　１９３０『教育制度改革概論』
鶴田武良　１９９６「清末・民国初期の美術教育」『美術研究』第３６５号
二本松市　１９８９『二本松市史』第９巻（自然・文化・人物　各論編２）
福島県　１９７１『福島県史』第４巻（通史編４近代１）
　１９７２『福島県史』第22巻（各論編８人物）
福島県立美術館
　１９９６『県展50周年記念展　ふくしまの美術　昭和のあゆみ』
馬淵東一　１９４７「追悼　移川子之蔵博士」『民族學研究』第12巻第２号